

風に匂う野

稲沢潤子



そんなことってない、それでは逆だ——洋子は心からそう思う。精神薄弱の弟には、だから一層、精一杯に生きるための喜びと希望が必要なのに！貧困な福祉行政にあらがって弟をいつくしみ支える高校生の姉とその母。人のいのちの尊さ、人の世が人の世であるあかしとそのあり方を問いつめて感動の渦を呼ぶ、長篇小説。

東邦出版社刊 ¥980

稲沢潤子●風に匂う野

昭和52年3月10日

発行

定価 九八〇円

著者

稲沢潤子

発行者

藤山真人

発行所
株式会社

東邦出版社

東京都新宿区西早稲田三―三

電話東京(二〇二七六三一)三

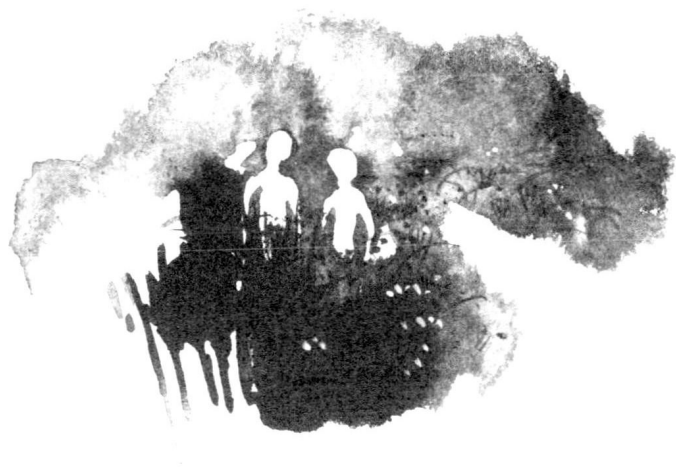
振替東京 八五二七五

装幀 一の宮慶子

印刷・ミツワ印刷

製本・東京美術紙工

風に匂う野



稲沢潤子

東邦出版社

も
く
じ

風
の
匂
い

野
の
光

波
の
面

雲
の
行
方

5

82

152

211

風の匂い

朝、学校への出がけに、玄関のガラス戸を静かにあけて、そっと体を外に押し出したときも、洋子はまだ迷っていた。迷ったまま学校へ出かけるのは口惜しかった。無性に腹が立った。

洋子は、腹立ちまぎれに、数歩先に落ちている小石めがけて足を突きだし、勢いよく蹴りあげた。小石は、思いがけなく大きく宙を飛び、向かいの材木置場の塀にあたって、はねかえった。はねかえった石とともに、こうん、という澄んだ音がひとつ、洋子の耳もとに届いてきた。

その音は、思いがけなかった。思いもかけない澄んだ音に、洋子は立ちどまった。そして、自分の蹴った小石の行方を目で追った。小石は、塀にはねかえって塀のわきをころがり、草むらにかくれていくところだった。

なんだ、ばかばかしい、と洋子は思った。ただの石くれじゃないか。

あんなちっぽけな、なんの変哲もない石に機嫌をなおされるなんてごめんだった。だいいち、高校生らしくない。

つまり、高校二年生としては……、洋子は、立ちどまったまま、深呼吸をひとつした。深呼吸をすると、自然、空を見あげる形になった。そこで、洋子は、おやつと思った。今まで気づかなかった

が、顔をあげると、空も、まわりの景色も、目が覚めるように明るいのだ。

洋子は、自宅のあるM町から、N市の県立高校まで汽車通学している。M駅からN駅まで汽車に乗っているだけで一時間はたっぷりかかる距離だから、洋子の朝は早い。洋子が家を出る時間は、たい

ていの家がまだ雨戸を閉ざしている時刻であった、冬などは、薄暗くさえあった。
が、きょう、四月なかばの空は白く明けていて、朝のまばらな陽の光が、材木置場の塀を斜めにたよりなげな光でくぎっていた。

「やっぱり、春なんだな」

その光に、まぶしくはなかったけれど、洋子は目をそばめた。そうして、やっぱり、母親のマツ江にひとこと相談してから出かけよう、と思った。つまり、形式的にでよいのだ。それ以上のことはする必要がない。洋子は、きびすを返すと、今、閉めてきたばかりの玄関のガラス戸に手をかけた。

「お母さん」

洋子は、ガラス戸を細めにあけ、低い声で母を呼んだ。

マツ江は、洋子を送りだしたあと、また浩の寢床へ行ったようだった。昨夜、浩の発作がひどかったので、マツ江は、また浩の寢床に入るつもりなのだ。そうやって添寝をしてやると、浩は安心して眠りつづけることができるのだ。浩は、昨夜の発作にかきみだされた睡眠をとりもどさなければならぬのだし、それにマツ江も、浩の発作にはじめから終わりまでかわりあって、睡眠不足にちがなかった。

「お母さん」

洋子は、玄関の上りがまちに両手をついて、さらに低く、強く呼んだ。

「なに？ 忘れもの？」

マツ江が、世話がやけるつたらない、といったような少し不機嫌な顔で出てきて、たたみかけるようにいった。

「ハンカチ？ チリ紙？」

マツ江は、洋子にただすまもなく、すぐ後ろ向きになって、玄関横の開き戸に手をかけようとした。その開き戸には、ハンカチが入っている。

「ハンカチ、チリ紙、毎日いるんだから、そんなもののきのうのうちに、ちゃんと鞆に入れとかなくちゃ」

そんな子供じみたもの、忘れたと思われなくなかった。浩じゃあるまいし。

「そんなんじゃない」

と、洋子はむっとしていった。むっとしたついでに、洋子は一気にいった。

「ね。先生がね。卒業後の進路、親と相談してきめてこいというんだけど、あたし、どこ大学にする？」

にっこり笑ってそういうつもりだったが、そうはいかなかった。逆に、詰問する口調で、少しとげしくなっていた。自分の思いどおりにいえなかったので、それを修正しようとする不調和で、洋子の口調は、自分でも嫌になるくらいいけばだったものになった。

昨夜は、弟の浩が発作だったのといえなかったが、しかし、きのうの予定では、まず、ね、あたし、大学に行ってもいいでしょ？ と穏便に切りだそうと考えていたのだ。だが、浩が発作だった。なにしろ、きのうは、夕食を食べて風呂に入ったあと、浩はずっと寢床に入らないで、うろろ部屋中を歩きまわっては、何もかもが気に入らず、わめいていたのだ。それが終わると、こんどはけいれんだった。けいれんが起こったために、やむをえず、わめくのが中断された、という具合だった。あ

るいは、浩のいらいらは、けいれんの前ぶれだったのかもしれない。とにかく、そんな具合で、母と二人きりの夜、とても自分の将来などについて語りだす余裕はなかったのだ。浩だって、かわいそうだ。いちばんかわいそうなのは浩だ。六つの年までは元気な子供だったのに、日本脳炎になって、頭も悪く、体も悪くなってしまった。だから、浩は、日に最低一度はいらいらするし、後遺症のけいれんが日に数度起こらない日はない。

そんなことを思いだして、洋子は、

「ね、どこにしておこうか」

と、ちょっと下手に出るふうにいった。

「え？」

と、マツ江がいった。

「つまり、どこ大学って書いておけばいい？ それとも、就職？」

「そんなこと」

不意を打たれた顔で、マツ江はいった。

「だって、先生が決めてこいって」

「早すぎるよ」

「もう、遅いんだよ」

と、洋子はいった。少しいらいらした。うちのお母さん、高校生のことについてなんて無知なんだろう、と思った。

「まだ、二年もある」

と、マツ江がいった。

「でも、もう遅いんだったら」

「汽車に遅れる」

と、マツ江はいった。それから、少ししんみりしたように、

「二年先のことなんか、わかりゃしない」

といった。

「だけど、決めておかなきゃならない」

「大学なら大学の試験、就職なら就職の試験、その試験のときに選んで決めればいいことでしょう」

「それでは遅いんだったら」

と、洋子はいった。ほんとうに汽車に遅れそうだった。

「だから、どの大学にでも入れるように、勉強しておけばいいんだよ」

なるほど、と洋子は思った。なるほど、と思うと、洋子は少しひるんだ。しかし、ひるんでいる場合ではなかった。

「それじゃあ困る」

と、洋子はいった。

「なにが困る？」

「困るんだったら」

「頑固」

と、マツ江はいった。

「お母さんこそ頑固」

もうこれ以上話している暇はなかった。洋子は腕時計を見た。ほんとうに汽車に遅れてしまう。あ

とは駅まで走っていくしかない。けれども、洋子はいったん玄関を出てまた戻ってきたのに、こんなありさまでもう一度玄関を出てゆく気にはなれなかった。これでは、なんのために戻ってきたのかわからなかった。そこで洋子は、少しばかり不本意ながら捨てぜりふを吐くことにした。

「お母さんが思ってるみたいない学校じゃないんだよ」

と、洋子はいった。

いってしまったから、捨てぜりふとしては少しも効き目がないことに気がついた。

「世間じゃね」

と、洋子は、もったいをつけて続けた。

「高校生って、もっと大事にされてるらしいよ。たとえばね、翔子さんところのお母さんは、翔子さんが朝、ごはんを食べていると、翔子さんの後ろにまわってきて、髪、結ってくれるんだって」

洋子はそういうと、くるっと振り返って玄関の戸をあけた。自分のことばの嫌味さ加減にあきれるので、やはり静かにあけた。振り返って戸を閉めるとき、洋子はマツ江の悲しそうな顔を見た。洋子は、すぐに後悔した。ごめんさい、ごめんさい。

が、洋子は、なにもいわなかった。そのまま黙って戸を閉めると、洋子は畑の脇の道を駅に向かってまっすぐに駆けだした。

M駅まで、洋子はひたすら走り継いだ。線路際の土手道に出たとき、洋子はちらっと腕時計を見た。M駅の、古びた駅舎は、もうすぐそこだった。こんなに走らなくても間にあう、そんな時刻を腕

時計の針は差していた。けれども、洋子は走った。胃の片側が、石を詰めたようにきゅうんと引きつり、洋子は風にあえいだ。

M 駅に着くと、さすがに走るわけにはいかなかった。発車の時刻にはまだ充分間があり、ひたむきな眼をしてホームを走っていく人など、見あたらなかったからだ。洋子は、ゆっくりとホームを歩き、前から三輛目の車輛に入った。胃の片側が、風にじかにあたったようにしくしくと痛んだ。しかし、これはいつものことだ。いつもだって、きょうほど走りづめに走り継いでくことはないが、しかし、それほど急がないで来ることもないのだ。三輛目に入って、洋子は、手前から二つ目のますにどすんと勢いよく腰をおろそうとした。そのとき、洋子は、そのますが、いつもと気配を違えているのに気がついた。

坐る場所に、同じクラスの翔子の鞆がなかった。隣りに坐っているのは、翔子ではなく、別の高校の男生徒だった。隣りの始発駅から乗ってくる翔子は、いつも自分の鞆で翔子の隣に洋子の席をとっておいてくれていた。その席も、三輛目のこちらから入って二ます目というように決まっていた。それは、他の乗客に、迷惑な行為というわけではなかった。始発から二駅目のM 駅では、乗客もまだ少なく、発車まぎわに飛びこんでくるのでないかぎりには、座席に不自由することがなかったからだ。

洋子は、坐ろうとした席からあわてて立ちあがり、きょうきょうとまわりを見まわした。翔子の所在はすぐにわかった。いつもとは反対側の左の隅に、翔子はうつむいて坐っていた。

「おはよう。きょうはこっちだったの？」

翔子は、うなずいた。

「なぜ？」

「なぜでも」

そういつて、翔子は首をかしげて斜めに洋子を見あげ、含み笑いをした。その含み笑いが気になったが、洋子は格別気にしないことにした。座席の位置など、もとからどうでもよいことだった。

「たまに別の席に坐ると、気が変わっていいね」

と、洋子はいってみた。気にしまい、と思つても、やはり、翔子の含み笑いが気になっていた。

「たいして変わりばえはしない。同じことだわ」

翔子は、洋子のことばにあらがうように皮肉っぽくいい、また含み笑った。きょうはご機嫌が悪かった。

「だって、そうでしょう。単語帳を広げている人、きょうの予習に英和辞典だか英辞典だか広げている人。数学の問題を解いている人。まわりを見ればそんな景色。おんなじ景色。ちっとも変わりばえはしてないわ」

「そうね。そういえば、たいして変わりばえはしてないね」

と、洋子はいった。なんだか、翔子の機嫌をとっているようでつまらなかった。

沿線の駅を一つずつ重ねるごとに、車内は混んでゆく。翔子との会話はそれなりとぎれ、翔子は文庫本を開いていた。洋子も文庫本を開いた。

が、活字は頭の中に入ってこず、洋子の思ひは、さきほどの出がけのマツ江との会話に集中し、そこをあてどもなくへめぐった。後悔の気持ちばかりが、幾重にも洋子をとりにまいた。あんなこと、いわなければよかった。悲しみやの母さん。浩が病氣になつて以来、母親のマツ江は、近所のおばさんたちから気丈な母親といわれて通つてきて、自分でもそう思っているらしいけれど、なかなかどうしてそうでもないことを、洋子は知っている。あんなこと、いわなければよかった。

そんなことを考えてばんやりしていると、ふっと、翔子が顔をあげて、ためらうように洋子にいつ

た。

「あなた、志願校、決めてきた？」

ううん、洋子は首を振った。

「だって……」

と、翔子が不服そうに声を切って洋子の答を待った。

「あたし、進学するかどうかわからないんだもの」

洋子はぼんやり答えた。

「うそ」

「うそじゃないわ」

「うそでしょう？」

「だって、きのうは父がいなかったし……」

「あなたのお父さん、いつもいないみたいね」

と、翔子がいった。疑わしそうな響きがあった。

「だって、東京に勤めているんだもの。土曜と日曜だけ、うちにいるの。土曜日の夕方帰ってきて、月曜日の朝、出てゆく。まあ、いつてみれば、いつもいないのだけれど、いるときはいるの」

「不経済ね」

「でも、独身寮にいるんだもの。年、とって行くせに若い人に混じって」

「家、引っ越さないの？」

「前は、引っ越そうと思ってたらしいけど。でも、今は、お金がないらしいわ」

洋子は、そういつて、ちょっと笑ってみせた。引っ越さないのは、お金のためもあるけれど、実際

は、浩のためだった。

「東京なんて、空気の悪いところ」

父の修造は、土曜日の夕方、家に帰ってくるときまってそういった。東京の空気は浩にはよくない、俺一人働いているだけでたくさんだ。マツ江も、今いるM市を離れたがらなかった。M市は、浩の生まれ、育ち、そして病氣になった場所だった。マツ江は、いつまでも浩を知っていてくれる人の傍にいたい、といった。

「翔子さんは？」

と、洋子はいった。

「なに？」

「学校、決めてきた？」

翔子は答えなかった。洋子もそれ以上聞かなかった。

窓の外に、緑色の生垣が一行に並んで過ぎていった。もう、終点のN駅に近かった。それを見ながら、翔子がつぶやくようにいった。

「あしたから、洋子さんの席、とっておけないわ。別々の席に坐ろう。ね」

「え？」

洋子は、げげんな顔で、翔子を眺めた。

駅を降りてから、洋子は黙って歩いた。

翔子の肩が、洋子の肩の触れる近きにある。翔子の肩は、男の生徒のように、すっすつと風を切っ

てゆく。翔子の靴は、アスファルトの道路にこつこつと正確な響きを伝えながら、リズムカルに先へ先へと運ばれてゆく。翔子は、洋子のようにうつむき加減など歩かない。まっすぐ前を向いて、軽快に足を運んでゆく。翔子の靴音がリズムカルでさわやかなのは、爪先とかかとの部分に留金を打ってあるからだ。それは、かかとをすりへらさないための仕組みであるけれど、当の翔子自身その仕組みを気に入っていて、靴音の響き具合に耳を傾けながら、とりわけ軽やかに、しかししっかりと足を運んでゆくのだ。洋子は、翔子の横顔をそっと眺めた。そうして、さっき汽車の中で聞いたせりふをくりかえしてみた。あしたから、洋子さんの席、とっておけないわ。ひとりになりたいの。ね、わかるでしょう？

翔子のそのことばは、少し気障っぽくもあった。洋子はそのとき、げんな顔で翔子を見たけれど、思いあたらぬことがないでもなかったのだ。翔子はボート部に入っている。そして二番をやっている。翔子のいる女子ボート部は強い。県のスポーツ祭ではたいてい一位だし、インターハイでも予選だけは一位で通過している。

このあいだ、県西のどこかの高校と親睦試合があつて、そのとき洋子は翔子から応援を頼まれたのだが、行かなかった。それも、「ええ」と返事をしておいて、行かなかったのだ。親睦試合など、どうせたいした試合ではないという腹が、洋子にはあつたのだ。けれども、「ええ」と返事をしてしまったのは、せっかく一所懸命になつている翔子の気分に水をさすのがためらわれたからだだった。

おまけに、悪いことには、そのあとすぐスタンダード・テストがあつた。スタンダード・テストは、英数国の三科目で、試験範囲も定まっていらない実力テストだから気は楽だけれど、いやなことには、試験の結果が職員室の横の廊下に張りだされる。そして、さらに悪いことには、洋子の成績が翔子の成績よりずっとよかったことだった。洋子は、その成績順位を、なけば茫然として眺めた。三百